

1

a

一挙

b

制約

c

平板

2

I

ウ

II

ア

III

エ

IV

イ

3

(記述題)

4

言の端

(完答)

5 A

イ

B

ア

C

エ

6

I

共

ゝ

る

II

個

ゝ

異

7

ウ

(完答)

8

具体的

こえる

9

言

能

10

い

(完答)

(完答)

2

a

口調

b

構

わず

c

器用

2

アレルギー発作

3

I

エ

II

ア

III

ウ

(完答)

4

誠も、

5

未来の自分

6

(記述題)

7 A

ぎ

B

三

・

五

C

根

D

た

(完答)

8

エ

ピ

ペン

の

打ち

方

9

エ

10

エ

11

(記述題)

1

3

経験の具体的内容を言葉で完全に表現し尽くすこととはできないということ。

(同意可)

2

6

ピ	て	エ
ペン	いる	ペン
を	こ	の
打	と	の
っ	を	あ
た	告	り
。	げ	か
	、	と
	小	打
	西	ち
	さ	方
	ん	を
	に	知
	エ	っ

(同意可)

11

医者になりたいという有人の夢。

(同意可)

「配点」

その他 2 1 1
6 3 1
2 1 7

各 2 点 × 13 = 26 点
各 6 点 × 1 = 6 点
各 8 点 × 1 = 8 点
各 4 点 × 15 = 60 点

- 1 a 「一挙」はあとに「に」を伴って、いっぺんに、一気にという意味になる。b 「制約」は条件を設けて活動を制限すること。c 「平板」は単調でおもしろくないこと。
- 2 ウ→ア、エ→イの流れになることはわかるだろう。ウ・アでは具体例が「感情」と「お茶の味」、エ・イでは具体例が「お茶の味」により絞られていることから、ウ・アが先にくることが考えられる。
- 3 「そのあいだ」が何と何のあいだなのか、「無限な距離がある」とはどういうことなのかをきちんと説明する必要がある。直前の一文のみに注目して「両者のあいだに大きな隔たりがあること」と答えたのでは「わかりやすく説明」したことになる。
- 4 この段落の最後に「そのために『言の端』という言い方がされるようになったのだと考えられています」とある。段落ごとの話題を意識しつつ読み進めることが大切である。
- 5 【A】の前では「古くは『事』と『言』とは通じるものと考えられていました」、あとでは「やがて『事』と『言』とは同じではないということに人々は気づくようになりました」と述べられているので、【A】には逆接のはたらきを持つ「しかし」がはいる。【B】の前では「わたしたちがそのときどきに抱く感情」とはどういったものが並べられているので、【B】には並列のはたらきを持つ「また」がはいる。【C】の前では「いま目の前にしているリンゴ」についての具体的な情報の例が複数取り上げられているので、【C】には同種のことごらのうちどれかひとつという意味の「あるいは」がはいる。
- 6 「ここより前」という指定を見落とさず、範囲を絞ってさがそう。傍線部前半の「その枠組みに取り込まれた」が「I」、後半の「その枠組みにあうように変形させられてしまいます」が「II」が無視されてしまう」にそれぞれ対応している。◎の文の「すが無視されてしまう」をヒントにさがそう。
- 7 線④の直前に「それだけでなく」とあることから、「言葉の持つ限界や制約」といった言葉の持つマイナス面というここまでの話題を引き継いでいると考えよう。
- 8 ここでの「鍵」とは問題を解決するための重要な手がかりのことである。通読する際に、本文の——線⑤よりも前にある「さて、言葉は：を乗りこえることができないうか」という問いかけの一文を保持しながら読み進めたい。
- 9 線⑥を含む一文から「そのような働き」がプラスの働きであることをふまえ、直前部分から丁寧にたどっていきこう。「いま言った機能」＝「言葉の喚起機能」である。
- 10 問9とも関連しているが、直前の「：意味のやりとりを終始せず」からも、——線⑦がプラスの表現になることがわかる。「言葉の喚起機能」によって「ありありとイメージさせることができ」る、「豊かな意味合いをも聞くことができる」といった表現から考えた
- 1 ②
- 1 a 「口調」の「口」は続け字にせずきちんと三画で書こう。b 「構」は似形異字である「講」と書き分けよう。右上部分の横棒の本数に気をつけよう。c 「器用」は手足などを思うように動かして物事をたくみにやり遂げるさま。
- 2 しばらく読み進めていくと、涼先輩の父親が救急医から「アレルギー発作」の可能性を告げられている場面がある。ぬき出し問題では過不足なくぬき出すことも大切である。
- 3 確実に答えが決まることから入れよう。【III】は、大役を果たしたあとで小西さんに乗せたへりを見送った直後なので、緊張から解放されたというのがふさわしいだろう。【II】は、「道下のときと同じ」かもしれないと感じ続けている時に「エビペン」という「あの日覚えた、忘れようがない」単語が出てきたことから考えよう。【I】は、寮から出てからここまでには有人が手伝っていないこと、【I】よりあとでも「背中を押されるが、有人の足は動かなかった」とあることから考えられる。
- 4 「下はパジャマで、裸足に靴をつっかけた」ということは、寝ていた（もしくは寝る用意をしていた）ところを着替えもせずに靴もまともに履かずにやって来たということである。細部もイメージしながら読み進めていくことが大切である。
- 5 ③の前後の、叔父や誠の父、和人、誠の声が聞こえた場面を、へりを見送ったあとで誠と二人で会話している部分で有人が思い出している。これらを通読する際に結びつけておきたい。
- 6 その後の場面で「エビペンを打ったのは君？」という医師からの問いかけに対して領いており、周りの大人たちからも「よくやった」と言われていることから、有人が「エビペンを打った」のは間違いないが、それだけでは説明不足である。——線④の前で「診療所にエビペンってのはあるか？ エビペンだ」と涼先輩の父が言っていることから、エビペンがあるか、エビペンがどういふものかわからないことが読み取れるので、有人がエビペンを打つ前にとった行動もきちんと説明したい。
- 7 A 「ねぎらう(苦労)」は労苦や骨折りを慰め感謝すること。同等もしくは目下の相手に使う。B 「三々五々」は小人数がまとまって行動するさま。C 「歯の根が合わず(合わない)」は寒さや恐ろしさのためひどく震えること。D 「たゆまず」は気持ちやゆるむという意味の「たゆむ」に打ち消しを伴った語であるが、多くの場合、今回のように「たゆまず」「たゆまぬ」といった形で使われる。
- 8 誠の「さっきのおまえ、おまえじゃなかったみたいだった」「すげーな、有人」という発言に対して「あれを知っていたのは：」と答えていることから、「さっきのおまえ」＝エビペンを打った有人＝「あれを知っている」有人ということになる。「『くの』』という形で」「ここよりあとのことばを組み合わせて」という指定を読み落としてはいけない。
- 9 もちろん「あの日」に「道下さんをうまく助けられなかった」ことを悔やんでいるのだが、「うまく助けられなかった」のはなぜかを正確に読み取りたい。「道下のときには、父は救急車を呼ぶだけでよかったと言った：あとはドクターへりを待つだけでいいのだ。素人は」「もし、あの日と同じなら：黙っていても誰も責めない。なにも、しなくてもいい。なにも動かなければ」という表現から、道下さんのときには「救急車を呼ぶ」以上の「素人」らしからぬ行動をとってしまったから今回は黙ってしよう、動かないでおこう、という有人の心情が読み取れる。
- 10 線⑦のような何気ない表現を文学的文章に入れるのは、もちろん何らかの効果を狙ってのことである。ここまでで誠が「過去は変えられないけれど、過去をどう思うかってことは変えられる」という話を有人にしていることから考えよう。道下さんの一件は有人の人生に影を落とすマイナスのものであったかもしれないが、その一件をプラスに変えてほしいと言っているのである。これをふまえると、「意味がないと思った信号機が見えた」ということは、意味がないものもとらえ方次第でプラスになるということだろう。
- 11 前書きの「叔父に憧れ、自らも医師を目指していた」、本文中の「僕は：：医者になりたかったんだ」という有人の告白、——線⑧の直前の「おまえ、川嶋先生に似てた」「おまえ、あるとき、すっげー、かつこ良かった！」という誠の発言、という流れを受けている。この「灯」は心にともったものであり、「かつて一度は消えた」ということは「一度諦めてしまった」ということである。